
暗黒街の天使

ドラキュラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗黒街の天使

【Nコード】

N2507S

【作者名】

ドラキュラ

【あらすじ】

マルセイユの丘にある白い家。

そこにはヨーロッパを支配する“伯爵”と女性が2人ほど共に暮らしている。

そこへ見知らぬ男物のスーツを着た女性が伯爵と共に現れた。

そして伯爵を狙う者が居ると言う情報が耳に入った女性達は自らの

手で始末する事にした。

序章：荒鷲の訪問

「……下種だわ」

私の隣でウリエルが葉巻を銜えながら新聞を読んでいた。

しかし突然、毒を吐いた。

「何が下種なの？」

新聞を覗いてみると、こう書かれていた。

『警察組織に暗殺部隊が居た！！』

デカデカと書かれているが、私には大して興味は湧かないし知っているから驚かずに一言だけ言った。

「ああ。これね」

「知っていたの？」

ウリエルは私の一言に驚いた声で訊いて来た。

「ええ。南米だと麻薬カルテルとかが幅を効かせているの。だから、警察なんかも組織の飼い犬よ」

南米などでは麻薬カルテルが幅を効かせて、警察などを買収していると聞いた事がある。

そして敵対組織などに警察を差し向けて、押収した麻薬を渡したり、暗殺したりするなどしているらしいわ。

「正義を司る警察が・・・・・・・・・・」

「正義を司る警察？違うわよ。権力の手先よ」

警察を始め、大抵がそんなものだ。

まあ、ウリエルはまだここに来て日も浅いから仕方ないかもしれな
いわね。

「何だか・・・・無性に何かを燃やしたい気分だわ」

ウリエルの身体から蒸気が出てきた。

直ぐ傍にあった新聞は真っ先に灰になったから、こちらにも直ぐ来る。
る。

「言っておくけど、ここで爆発させたら飛天に追い出されるわよ？」

私はここで切り札とも言える言葉を言った。

「・・・・・・・・それは、嫌」

ウリエルは、蒸気を抑え始めた。

「それが利口ね。まあ、貴方だったら何処に行っても歓迎されるわ
よ」

私とは違つて皆に好かれているからね。

「・・・あの方に好かれている方が何倍も良いわ」

「素直じゃないわね」

私は煙草を吸いながら、飛天の帰りを待った。

現在、飛天は外出中。

何でも会議があるらしいの。

ここでも警察の暗殺組織が暗躍していると言われているの。

何処に行つても必ず膿は出る物よね。

「ここはあの方の領地でしょ？領主の許しも無しにそんな事をして良いの？」

「領主だろうと知らない事もあるわ。それに・・・あの方は裏の領主。表の領主ではないわ」

だから、知らない事もあるの。

「それを今、会議で話しているのね？」

「ええ。恐らく先ず表の方で規制したりするわね」

それで大抵の連中は取締が出来る。

まあ、大物と表の世界では言われる奴ら何かは、裏で裁く事になるわね。

「誰が出ているのかしら？」

「気になるの？」

「妻として夫の仕事関係者は知っておきたいの」

「何時から結婚しているのよ？」

「知らないの？私、周りから“奥様”って言われているのよ」

私が前まで呼ばれていたのに、もうウリエルに奪われたようだ。

「それじゃ私は何よ」

「愛人。それでないなら相棒じゃないの？」

「優越感に浸った言い方ね」

「実際に優越感に浸っているからよ」

「まったく、どうして私の周りにはこんな奴らばかりなの？」

「貴方だけに言われたくない台詞だわ」

ウリエルは葉巻を銜えて言い返しながら、再び質問をしてきた。

「それで誰が居るの？」

「飛天に従う人間と・・・男爵、暗殺者、騎士、傭兵、道化師、忍者、狩人よ」

「何それ？」

「あの人に仕える、部下を職業に例えたの」

「道化師が居るのはどう言う事？」

「道化師は王の忠実なる部下であり“所持品”よ。それに道化師だけが唯一王に進言できるの」

「そうなの？道化師なんて馬鹿な事をやることしか能が無いと思っていたわ」

「酷い言い方ね。道化師には道化師なりの信念もあるし感情もあるのよ」

「今度からは気を付けるわ」

ウリエルは葉巻に火を点けながら答えた。

それから3時間ほどして、飛天が帰って来た。

だけど、一人じゃなくて誰かと一緒だけど。

「お帰りなさいませ。飛天様」

ウリエルは飛天を玄関から降りて出迎えた。

私は玄関の上で出迎えたけど。

本来なら飼い主が帰って来た子犬のように尻尾を振りまくんだけど、今回はさっきも言った通り誰かと一緒だったからそうじゃなかったわ。

いえ、寧ろ敵対心丸出しの眼差しを向けていたわ。

飛天と一緒に居たのは女だった。

右目に縦線の刀傷を持った女で鋼色の髪を腰の辺りまで伸ばしていた。

それをポニーテールで纏めていたわ。

胸と腰の辺りもそれなりに出ていて良い身体付きだわ。

だけど、良く見れば実戦で鍛えられた身体だと解かる。

瞳は赤いけど中身は冷たい色。

顔は端正な鑿で彫られた感じの騎士ね。

でも、実際は傭兵で性格は冷酷無比で残酷。

人を無表情で、静かに、そして確実に殺せる腕を持っている。

着ている服は到って普通の黒いスーツ。

だけど男物。

容姿とマッチして男装の麗人って感じで女達に囲まれそうね。

「お久し振りですね。ガブリエル様」

女は私に赤いけど冷たい瞳を向けてきた。

「ええ。久し振りね。“荒鷲”さん」

私は女の渾名を言った。

「誰なの？」

ウリエルが私に訊ねてきた。

その声にはかなり・・・いえ、凄まじい嫉妬が込められていた。

「ヴラド一族の生き残りよ」

私はそれに平坦な声で答えた。

「あの魔界最強の傭兵と謳われた一族の？」

ウリエルは荒鷲を見た。

「初めまして。ウリエル様。私はヴラド・ブローディア・クレセントと申します」

長ったらしい名前を名乗った荒鷲にウリエルは眉ひとつ動かさずに

見ていた。

「初めまして。ミス・クレセント。私の名は……………」

「ヴァイリング・ムサミナルエルンスト・ウリエル。12人のセラ
フィム（熾天使）の一人にしてエデン（楽園）を護る女天使」

荒鷲はウリエルの言葉を遮り淡々と喋り始めた。

「かの大天使ルシュフェールが天界に潜入した時、唯一その正体に
気付き追討するも後一步の所で逃げられた」

そして神を冒瀆する者は誰だろうと許さず罪人には正義と言う名の
鉄槌を下す“断罪の天使”と呼ばれている。

そう荒鷲は言った。

「よく私を知っているわね」

「貴方様の事はガブリエル殿からも聞いておりますし魔界でも噂で
すから」

「そう。私も貴方の一族は聞いているわ」

あらゆる戦場に出て雇われたら敵味方にも別れて殺し合い、女子供
老人を問わず一族全員が古今東西あらゆる暗殺術に長けている。

依頼は完全遂行で邪魔な物は仲間だろうが、容赦なく殺し裏切りも
失敗も許さない。

だが、魔界で法や制度が出来上がると活躍の場を失い……

「その後は非合法な仕事を淡々とこなし、何時しか“汚れ屋”と言われるようになった」

そして最後は魔界の皇子を暗殺しようとした。

「だけど、暗殺は失敗。最後は一族郎党が全員で挑むも、たった一人の悪魔である皇子の手に掛り皆殺しになった」

「その通りです。ですが、私だけは“運が良く”生き残る事に成功しました」

「元敵の貴方が、どうして抹殺する相手だった“皇子”である飛天様の部下になったの？」

「プライベートな事を話す気はありません」

「私はこの方を護る存在。もしも、の事を考えれば強制的に聞く事も可能よ」

「それは……断罪の天使として、ですか？」

「いいえ。一人の女として、聞いているの」

「……この方が、私を信用して下さったからです」

たった一人の悪魔である飛天に一族を殺されたが、生き残った自分。

それから暗殺者として生きて来たが、ここでも飛天を暗殺する依頼を受けた。

そして狙ったが返り討ちとなったのは言うまでも無いでしょ？

で、普通なら殺す所なんだけどこの娘は生きている。

つまり助けられたのよ。

理由は飛天の十八番である“気紛れ”だと思う。

敵に情けを掛けるのは命取りになるけど、どうやら彼女の場合は恩に感じたらしい。

「私は、……今まで暗殺者としてしか、………相手に見られませんでした」

暗殺者は表には決して出ない。

だけど、仕事は完璧にこなす。

それには依頼人が絶対的とも言える信頼を寄せる必要があるの。

でも、相手には毎度のように信頼されなかった。

所が命を狙いながら返り討ちにした飛天は信頼してくれた。

それが応えたらしい。

「私はこの方を護る存在です」

「……その言葉、信じるわ。ただし、覚えておきなさい」

もしも、飛天に害なす者と判断すれば飛天が庇おうと容赦なく灰にする。

「私はね……嘘と出来ない事は言わない主義なの」

「覚えておきましょう。では、私からも一言」

「何かしら？」

「万が一……貴方が我が主を護れるに値しない女と分かれれば、貴方の首を胴から飛ばします」

私も嘘と出来ない事は言わない主義、と荒鷲ちゃんは言った。

「良いわ。では、お互いそうしましょう」

「ええ」

二人は目を合わせて頷いた。

『何だか新たに現れた恋敵の宣戦布告ね』

何て私は思いながら、飛天に煙草を勧めてやった。

「それにしても、貴方の周りには色んな者たちが多いわね」

「別に。ただ気が付いたら集まっていたただけだ」

「そうなの？それにしても、皆殺しにした一族の女をよく懐に入れたわね？」

「使えると思っただけだ。それに、こいつ自身がこう言った」

『私は貴方の弾避け』

「随分とストレートな言葉ね」

「遠回しな言い方は嫌いなんです」

荒鷲は煙草を銜えて答えた。

「それは私も同じよ。だけど、幾ら何でも仮にも家族を皆殺しにされたのに、よく飛天に仕えるわね？」

「先ほども答えた通りです。それに・・・殺された者たちは、どうせ何れは死ぬ運命だったんですよ」

暗殺者などと言う職業だ。

いつ死んでも可笑しくない。

偶々、自分は運よく生き残れた。

一族の仇を討つなどと言うのは現実的でないし、合法的でもないと言いつつ切った。

「随分と冷めた言い方ね」

「私にとって家族と言う言葉は無縁です。父も母も私を娘として考
えませんでした。単なる駒です。逆に私にとっても両親は上司であ
り赤の他人以外の何でもありません」

『鵠より冷酷であり残酷だ』

かつて飛天が言った言葉が今になって分かった。

確かに、冷酷であり残酷だ。

ここまでドライで居られるんだから頷けるわ。

私はそう思いながら、この女なら下手な事はしなと思った。

第一章：4人の警官

「それで護衛として付いて来たの？」

私の問いに荒鷲は、壁に背を預けながら頷いた。

暗殺者としての性か、この女は壁に張り付いているの。

だけど、飛天を直ぐに護れる位置に居るし、尚且つ死角を遮っている。

まあ、ロケランでも撃たれない限り、この窓を破る事は出来ないけど。

家の中に入った飛天と私たち。

私は先ず荒鷲がどうして飛天と共に来たのかを訊ねた。

荒鷲が言うには会議の中で飛天を狙うという情報が入って来たので護衛として来たらしいの。

「俺は良いと言ったが、こいつが断固として聞かないんだ」

飛天は煙草を蒸かしながら荒鷲を見た。

「貴方様はご自分の事に対して何処が無鉄砲です」

平坦な声だけど、何処か説教する口調で荒鷲は飛天に言った。

「部下なのに容赦ないわね」

仮にも主である飛天に対して容赦ない言い方だ。

「この方を想ってこそ言っているのです。それに・・・先ほど変な連中が来るのが見えたので尚更です」

「例の暗殺集団かしら？」

ウリエルが葉巻を吸いながら、窓を見た。

「恐らくそうでしょう。明らかに眼が“澄んで”いましたから」

「汚れていたのではないの？」

「大抵の者は、あの手の者たちの眼は汚れていると言います」

しかし、自分のような汚れ仕事をした者には澄んで見えると言った。

「どうせ、自分達の行いは正義の為、社会の為、民の為、と思っているからだろうな」

だから、多少の犠牲はしょうがないし出ても当たり前。

そんな考えを持っている、と飛天は断言した。

「・・・・・・・・・・」

ウリエルは何処か哀しげな瞳で飛天を見た。

自分が過去にやってきた事に対して、飛天に罪悪感を抱いたのだろ
う。

昔の彼女も、今の奴等と同じようなものだったからね。

「……お客様が来たわ」

ウリエルは哀しい瞳から冷たい瞳に変えて窓越しに外を見た。

「何人だ？」

「4人です。拳銃を腰に下げた制服警察官です」

ウリエルは窓越しから見た人数と服装を飛天に説明した。

「油断させるつもりかしら？」

私が訊く。

「かもな」

飛天は私の質問にぶっきら棒に答えながら煙草を蒸かしている。

まったく気にしていない。

何処吹く風だ。

まあ、たかが4人如きでやられるほど弱くないから来る余裕ね。

「私が行きます」

ウリエルはスカートのポケットに入れておいた6連発式リボルバーのホルト・ローマンを取り出した。

ローマンとは法執行人の意味で裁判官も務めていたウリエルにはピツタリの拳銃よ。

弾倉ラッチを前に押してシリンダーを外に出して弾が装填されているのを確認したウリエルは手でまた戻した。

それから玄関に向かった。

「・・・気を付けろよ」

飛天は灰皿に煙草を捨てて、意味も無い言葉をウリエルに投げた。

でも、それがウリエルには嬉しいのか喜々とした顔で頷いた。

「さて、鬼と出るか蛇と出るか・・・・・・・・・・」

飛天は徐に椅子から立ち上がり腰のホルスターから愛用のモーゼルM712を取り出した。

もうかなり昔に作られた拳銃。

セミ・オートとフル・オートが可能な銃で、ストックを取り付ければライフルとしても活用できる。

でも、大きいし嵩張るし金も高いという最悪な条件を持っているから殆どまともに相手にされなかったわ。

それでも飛天にとっては良い銃であり恋人だけどね。

「久々の銃撃戦ね」

私は、楽しみだと言いながら愛用のコルト・パイソンを取り出した。

「パイソン357マグナム。随分と凝った銃を使いますね」

荒鷲は私のパイソンを一瞥した。

「貴方は何かしら？」

私が訊けば、荒鷲はスーツの懷に手を入れた。

そして左脇から出されたのは“コルト・ゴールドカップナショナルマツチモデル”だった。

黒いスライドは磨き上げられた強化スライドで、グリップ全体には滑り止めの溝が掘られていた。

最高級のガバメント・モデルを更に改良した物。

この銃はコルト・ガバメントを更に改良し、尚且つ命中精度が高い銃身を採用した上で各部品も熟練工が加工したから最高よ。

弾は45口径で申し分ないし、ね。

まさにお墨付きとも言えば良いかしら？

私のパイソンと並んでコルト社の最高級の代物よ。

「貴方も凝ってるじゃない」

荒鷲は私の言葉を無視してコルトのスライドを引いた。

これにより初弾が装填されるの。

コルトを右手に持った荒鷲は壁から離れドアに張り付いた。

「主。隠れていて下さい」

「いや良い。それよりウリエルの方は、どうだ？」

「・・・坊やたちと話しているわ。えーと、マルセイユの署長が食事に誘っているらしいわ」

私は窓越しからウリエルと4人の警官達の様子を飛天に言った。

「わざわざそんな事を言いに4人で来たのか？」

飛天は丸つきり信用していない口調で私に言ってきた。

嘘でしょうね。

大体、あの署長なら自分で出向いて来るわ。

それを部下に行かせるなんて有り得ない。

つくづく、詰めが甘いわね。

「・・・どうやら、帰ったようよ」

坊やたちは何処か慄然とした様子で帰って行った。

暫くしてウリエルが戻ってきた。

「どうだった？」

「1時間ほど前に銃を撃った様子です。血の臭いもしました。それに、車には、アサルトライフルもありました」

淡々とウリエルは自分が感じた事、見た事を私達に説明した。

「なるほどな。てことは、斥候辺りか」

「でしょうね。何も知らずにこのこ敵陣に乗り込むほど向こうも馬鹿じゃないらしいわ」

パイソンの撃鉄を戻して、ホルスターに仕舞った私は煙草を銜えた。

「どうするの？」

「さあて、どうするかな・・・」

飛天も自分の煙草を銜えて考え始めた。

「我が主。あの者たちの始末は私にさせて下さい」

荒鷲が飛天に頼みこんできた。

「お前に？」

「私の仕事は汚れ仕事が専門です。何より、あの者たちの眼を見てみると、無性に腹が立つのです」

暗殺はあくまで、汚れた仕事。

それをさも綺麗な仕事と思っている辺りが、暗殺者として許せないのだろう。

「別に良いが、一人で良いのか？」

「ご安心を。必ず、全てを処理します」

「分かった。では、お前に処理を任せる」

「御意に」

「よし。では、頼む」

荒鷲は頷いた。

「飛天様。私もその仕事、受けたいです」

ウリエルが飛天に近付きながら、自分もやりたいと言ってきた。

「これは私の受けた仕事です。貴方がやる必要は無いです」

「保険よ。万が一、貴方がしくじるかもしれないし何より・・・私

は貴方をまだ信頼していないから」

「……良いでしょう。ただし、足で纏いにはならないで下さいよ」

なったら、その時は消すと荒鷲は冷たい声で断言した。

「それは私もだから安心して」

ウリエルも冷たい声で断言してみせた。

まるで喧嘩の売り言葉に買い言葉だわ。

心底、呆れながら私は飛天を見た。

『私も参加して良い?』

目で聞いた。

恐らくこの二人なら今日中に犯人を見つけ出して、地獄に連れて行けるだろう。

だけど、かなり手荒い方法で、間違えば冤罪物だ。

それを考えるとストッパーとして私が一緒の方が良い筈だ。

別に、面白そうだから参加する訳じゃないからね?

まあ、少しは考えているけど。

『そうしろ。クレセントは鵜より冷酷だ』

あの忍者より冷酷とは恐れ入るわ。

鵜と言うのは、飛天に仕える忍者なの。

飛天だけが主で唯一、命令を下せて生命の権利があると公言する男なの。

そこまで心酔しているのよ。

鵜という男は。

一歩でも間違えれば危険極まりない男。

まあ、飛天の敵に回るというのは、万が一にも有り得ないけど。

で、その鵜よりも冷酷であると言わせたクレセントこと荒鷲。

『どんな仕事をこなして来たんだか・・・・・・・・・・・・・・・・』

恐らく、想像も出来ない仕事をして来たんでしょうね。

なんて考えながら、私は煙草を吸った。

第二章：搜索と日記

私と荒鷲、ウリエルの3人はマルセイユの警察署に来ていた。

何でわざわざ敵陣の本拠地に乗り込んだかと言えば、簡単よ。

待つより打って出る。

攻撃は最強の防御と言うでしょ？

それに釣りみたいに何時、掛るか分からない魚を待つほど私は我慢強くないの。

それは残り2人にも当て嵌まる事だけだね。

マルセイユ警察署に出向いた私たちは直ぐに署長と話し合った。

「伯爵様には、その、大変な、あー、ご迷惑をお掛けしまして・・・はい・・・」

署長は冷や汗をハンカチで拭きながら弁明をしている。

ウリエルと荒鷲の二人に詰め寄られたら、冷や汗も掻く。

何せ荒鷲の方は、サプレッサーを取り付けたコルトを署長の眉間に押し付けているんだから。

まるで殺し屋だわ。

まあ、今も殺し屋だけど。

「言い訳は良いの。それより、その暗殺集団は何処？」

ウリエルが睨み据えて署長に問い質した。

「それが……今朝から来ていないんです」

何でも4人組で常に一緒らしい。

で、その4人組は私と飛天の家に来た連中。

つまるところ、あの坊やたちだけで暗殺は行われていたらしい。

「坊やたちの住所と名前なんかを教えてくれない？」

私は煙草を吸いながら署長に言った。

署長は急いで引き出しから資料を出した。

「……全員が巡査クラスで、同じ土地に生まれ、同じ学校を卒業して、同じ次期に警察採用試験に合格。まるで兄弟ね」

資料を見ると、全員が強い正義感を持っている、と書かれていた。

強い正義感を持ち過ぎたせいで、警察の腐敗なんかに気付いて正そうとした。

だけど、出来ないで終わり目の前の犯行も阻止できない事へ苛立ちを感じた。

そして映画とか色々な物を見て、自分も映画の主人公のようにやりたい、と思って犯行を犯したのかもね。

資料を見ながら私は坊やたちの思考を思い浮かべた。

『確か・・・現場は家などで、しかも銃声は殆ど聞こえなかった。そして至近距離から発砲』

しかも、直ぐに現場から逃亡せずに、証拠品などを持ち去った。

となれば、そうとう用意周到な連中ね。

プロファイリング的に言えば「秩序型」ね。

秩序型は、計画的に犯行をする。

時刻、場所、武器、なども詳しく考えて、更に逃亡手段も考えているから厄介だわ。

だけど、逆にその計画的な犯行だから、次の犯行などを予想し易い面もあるわ。

しかも、家に行けばそれなりに証拠も見つかるし、ね。

例えば日記とか。

日記に鮮明に書き残すから良い材料になるわ。

「この資料、もらっわ」

どうせ、新たに4人ほど採用する事になるだろうから。

「ど、どうぞ」

「ありがとう。さあ、行くわよ」

私は二人を引き摺る形で警察署を出た。

二人揃って我が強いから、私の言う事を聞かないの。

まったく先が思いやられるわ。

車に乗り込んだ私たちは直ぐ様、4人組の住所に向かった。

4人とも同じアパートに住んでいるわ。

そして同じ階で隣同士と言うから、偶然にも程があるわ。

アパートは郊外にあった。

それなりに金が必要そうなアパートだ。

私たちは直ぐ様、管理人に飛天の使いと言って鍵を開けてもらった。

先ず一人目、マックス・ペイン。

年齢、25歳にして巡査。

4人組のリーダー格と思われる人物で、ライフルによる狙撃が得意。

資料に書かれていたのは、こんなものだ。

で、そのマックスの部屋に入って見て、ビックリしたわ。

女の顔写真で部屋中が埋め尽くされていたんだから。

「随分と撮ったわね」

私は写真を見まわした。

全員が殺された被害者の家族か恋人。

机には日記が置かれていた。

それを開いて見る。

『7月10日。今日も4人でパトロールをした。そこで可愛い女性を見つけた。花屋の娘で、花の精霊みたいだ』

最初の方は普通の日記だった。

だけど、次のページからは違っていた。

『花の精霊に、“害虫”が取り付いた！！可愛い彼女に汚い手で触るな！？しかし、彼女は微笑んでいた。なぜ、害虫に微笑むのか理解に苦しむ』

日記はまだ続いた。

『しかし、その害虫も死んだ。俺が、頭に9mmを5発も撃ち込んで駆除してやった。これで彼女は無事だ。これからも俺は、彼女を護る騎士でありたい』

追記と書かれていた部分には、こつも付け加えられていたわ。

『かなりの罪人を処罰して来たが、減る所が増える一方だと気付いた。何故だろう？伯爵と言われる男一人だけの問題ではない。何故だ？分からない。分からないが、俺は悪がある限り正義のバツジを胸に戦い続ける』

最後の方は、まるで弱気な自分に対する叱咤ともエールとも言える文字であつた。

私は日記を閉じて、部屋中を隈なく探した。

叩けば、幾らでも埃は出る物ね。

ちよつと叩いただけで、埃だらけよ。

部屋には拳銃が10丁、ライフルが15丁、弾薬が3000発も見つかった。

幾ら何でも持ち過ぎだわ。

その拳銃、ライフルには全部、サプレッサーを取り付ける為のネジ切りまでされていた。

少々、荒い所を見れば自分でやったと想像できる。

私は日記だけを持って部屋を出た。

隣ではウリエルが、更に隣では荒鷲が部屋を探索している。

だから、私は最後の4人目の部屋に入った。

4人目の部屋は、チャールズ・ホイットマン。

コメディアンみたいな名前で、顔もコメディアンになった方が良かった顔だったわ。

部屋の中も似たようなもので、子供部屋みたいだった。

そこでも日記があり、読んでみた。

『8月10日。今日は、一人で仕事をこなした。今日の罪人は、子供だった。万引きをしていた所を見つけた。だけど、直ぐに教会に行き神父に懺悔をした』

日記は続いた。

『自分はこの子を処罰する事に何処か罪悪感を覚えた。この子は生きる為に罪を犯した。だが、それを悔いて神に懺悔をした。それを殺すのは……どうかと思った。だが、自分は殺した』

神父も一緒に、と書かれていた。

『子供と神父は折り重なるように死んだ。正確に言えば、神父が子供を護る形だった。返り血で十字架が赤く染まった。綺麗だ。そして、聖母マリアがこちらを微笑んでいるように見えた。嗚呼、彼女

も嬉しがっているんだ。罪人を処罰した自分の勇気ある行動に』

自己陶醉が過ぎる日記だわ。

最後の方なんて、自分は正義の騎士で、何時の日か王女と結婚するなんてメルヘンチックな事まで書く始末だ。

日記以外の物を探したが、ここには無かった。

部屋を出た所で荒鷲とウリエルに会った。

「どうだった？」

「・・・カレンダー全てに で囲まれていた日がありました」

荒鷲がカレンダーを見せた。

月事に で囲まれた日。

その日は、暗殺が起きた日だ。

「つまり、これは暗殺決行日ね」

1週間から2週間ごとに付けられている。

「こっちの日記には、計画内容が書かれていたわ」

ウリエルが日記を見せた。

内容は何処で襲い、何処に遺体を放棄するか、殺害方法から逃走経

路まで綿密に書かれていた。

「貴方は？」

ウリエルが聞いてきた。

「日記ぐらいね。私の調べた部屋の坊やたちは、何処か自己陶酔な考えを持っているわ」

二人に日記を見せた。

「私の部屋の日記には、こう書かれていました」

腐った林檎は木から切り落とさなければならぬ。

まるで、“ポル・ポト”ね。

「私の方はこうよ」

現世という地獄にいる罪人は、正義の騎士である自分達が全員、根絶やしにしなければならない。

「4人とも、救いようのない馬鹿だわ」

断言した。

これだから正義は嫌いだ。

諸刃の剣なのよ。

法が成立しない場所のなら、坊やたちの行いは正義かもしれない。

だけど、法が成立している場所では、悪だ。

詰まる所、坊やたちの行動は悪とも正義とも取れる。

まあ、どっち道、殺すから関係ないわね。

「それと、今日も暗殺をしようとしています」

荒鷲が見せたカレンダーの日付には で囲まれていた。

そして日記は、こう書かれていた。

『ここでの仕事も限界だ。最後の仕事をする。場所は、デパートだ。デパートなら悪人が沢山いる』

つまり、人を沢山、殺して最後はトンズラ、という事ね。

「デパートは何処か書いてある？」

「書いてないです。しかし、この下種共の性格などを考えれば、一つの場所だけでなく複数のデパートを襲う筈です」

荒鷲は、同じ暗殺者として分析した結果を言った。

「それじゃ、手当たり次第に当たるしかないわね」

あまり好きな方法じゃないし効率的とは言えないけど、仕方無いわね。

私たちはアパートを出て、デパートを手当たり次第に当たり始めた。

第三章：八つ当たり

私たちは手当たり次第にデパートを当たるが、見当たらない。

「効率が悪い方法は嫌いだわ」

もっと仕事はスマートにしてくちやいけないのに。

それなのにこの二人と来たら、自分達で仕事をすると言ったくせに
まるでやらない。

あくまで4人組の坊やを始末するのが前提で、他は私に押し付ける
んだから性質が悪い。

で、今居るデパートで5件目。

好い加減、出てくれないと私の方から出す勢いだ。

でも、その願いは叶ったわ。

一発の銃声がした。

「ビンゴっ」

私は急いで、銃声のした方へと走る。

だけど、その横を二人の背中が追い抜いた。

「何で、あんた達が走るのよ」

思わず口に出してしまった。

「私の仕事です」

「私の使命よ」

別々の言葉を言いながら急ぐ二人。

で、銃声のした方向へと急ぐと4人組が銃を乱射していた。

一人はS & a m p ; W M 7 6。

一人はイサカM 3 7。

一人はM 1 6 A 1。

一人はベレッタM 9 2 F S。

よくもまあ・・・映画の見すぎね。

まあ、自分の死に様を飾る武器としては寂しくないわね。

私はパイソンを抜いて、S & a m p ; W M 7 6を乱射する男に狙いを定めて引き金を引いた。

女の写真を集めていたストーカーみたいなリーダー格の男よ。

パイソンから撃たれた38スペシャル弾は男の眼を貫いて、壁にめり込んだ。

男は目から血飛沫を上げて仰向けに倒れながら銃を乱射していた。けど、フルオートだと30秒もあれば直ぐに空になるのならかった。

良く見れば、50連発に改造されたマガジンだった。

「貴方達、おいたが過ぎるわ」

私はパイソンを弄びながら残りの3人に言った。

「貴様は……殺し屋だな!!」

男の一人が私を見て、コルトM16A1を向けて来た。

スポーター・モデルで、セミオート限定の奴だったわ。

私は彼が引き金を引く前にパイソンの引き金を引こうとしていた。

だけど、私より先に荒鷲とウリエルが同時に彼の頭を撃ち、残りの奴等も同じく撃って殺した。

私の仕事は最初の男で終わり。

後は二人が始末してしまったわ。

あーあー、何だか凄く不愉快な気持ちだわ。

散々、私を扱き使った上げくに獲物を横取りするんだから。

それにしても荒鷲の腕前は大了た物だ、と思った。

2発ずつ相手の額と心臓に必ず命中させた。

そして近付いて更に2発ずつお見舞をした。

一見、残酷に見えるけど完全に殺す事を確認していると私には見え
たし、分かった。

流石は一流の殺し屋として名を馳せただけはある、と感心する。

その横でウリエルは、葉巻を吸い余韻に浸っていた。

彼女の身体から湯気みたいなのが見えた。

何だか、今日も飛天を相手にウリエルがロデオをしそうな気になっ
た。

勘弁してよ。

この女がロデオをやると家が地震に遭ったみたいに揺れるから嫌な
のに。

そんな事を思いながら私も煙草を吸い、一仕事終えたという余韻を
噛み締めた。

その後、私たちは警察に呼ばれたけど名前だけの事情聴取を受けて
直ぐに解放されたわ。

まあ、警察としても身内の不祥事をどう世間に説明するかで手一杯だし飛天の事も考えての行動だろうけど。

で、私は飛天が待つ家へと帰った。

家へと戻ると飛天は煙草を吸っていた。

飛天は椅子から立ち上がると私に質問をして来た。

「終わったのか？」

飛天の問いに私が答える前に荒鷲が答えた。

「はい。全て滞りなく終わりました。我が主よ」

「そうか。御苦労だったな」

飛天は荒鷲に煙草を勧めた。

「頂戴します」

荒鷲は断ってから煙草を取った。

「で、警察は何か言っていたか？」

「貴方様には大変な思いをさせて申し訳ありません、という事です。後日に謝罪とお詫びの品を持って来るとの事です」

答えてから荒鷲は煙草を銜えて自分で火を点けた。

「そうか。あいつも大変だな。表ではマスコミや上司に叩かれ、裏では俺らに叩かれるんだ」

「中間管理職の業よね」

私は煙草を吸い、署長の泣く姿が目に見えた。

先ほどの事も考えるとノイローゼになるかもしれないわね。

でも、私には関係ない話だわ。

飛天以外の男がどうなろうと知った事じゃないからね。

その後、飛天は荒鷲を誘って二人だけで何処かに出かけた。

もちろんウリエルも付いて行こうとしたわ。

『私も行きます』

と言っただけで目が嫉妬一色に染められていて荒鷲は明らかに迷惑そうな顔をしたわね。

だけど、飛天が駄目、と言ったので私とお留守番なの。

そのせいでウリエルは無性に機嫌が悪いわ。

その横で私はバーボンをストレートで飲んでいるから、八つ当たりとも言える風が直接くるわ。

「そんなに怒らないでよ。こっちまで被害が来るわ」

しかも、バーボンが不味くなる。

「・・・どうして、あの女だけが、飛天様と一緒に出かけたの・・・」

ウリエルは私の言葉などお構いなしに不機嫌な顔と声で私を見て言い続けた。

地を這いり回る蛇みたいに陰湿な声で、声だけなら犯罪者と思われるても可笑しくないわ。

「知らないわよ」

それに対して私はぶつきら棒に答え、バーボンを飲んだ。

だけど、味が不味い。

ウリエルのせいだと思うが、今のウリエルに下手な事を言えばどうなるか分からないから言わないでおいたわ。

「・・・無性に何かを燃やしたい気分だわ」

ウリエルは前と同じ言葉を言った。

「物に当たったりしないですよ？」

前にも言ったけど、飛天に追い出されるわ。

「じゃあ、貴方になら当たっても良いの？」

「何でそうなるのよ」

物に当たらない代わりに私に八つ当たりする気のウリエル。

「貴方なら、別に簡単には死なないし頑丈なもの。それに飛天様も貴方に八つ当たりするなら文句は無い筈よ」

また痛い所を言って来るわね。

「生憎だけど、私は八つ当たりされたくないわ」

「私はしたいの」

「知らないわよ。それに時期に帰って来るわ。それまでに風呂の準備でもしてなさい」

ウリエルは私の言葉に何処か頷ける面があるのか、無言で厨房へと向かった。

私は一安心して煙草を銜えた。

そこへ携帯が鳴る。

「もしもし？」

『俺だ。悪いが、今日の夕飯は要らない』

外で食べてくる、と飛天は携帯越しに言った。

冗談止めてよ。

もしも、ウリエルにそんな事を言えば、私がどうなるか分かった物じゃない。

だけど、無情にも飛天は最後通告とも言える言葉を言ってきた。

『じゃあ頼む』

そう言って携帯は切れた。

私は携帯を懷に仕舞い、どうやってウリエルを宥めるか考えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2507s/>

暗黒街の天使

2011年4月5日21時10分発行